

〈デジタルコンテンツ〉のブログを〈紙〉の本にした新時代のミニコミ誌

まがじん ③

2012年お年賀号



パート1
ブログに書いた
作品レビューを
本にしてみた

パート2
政治・経済・社会に
ついてちょっと語る

パート3
ニコニコ動画で
怪談を朗読したよ

パート4
「まえのん小説」は
こうして生まれた

まがじん工房

ぎゃふん③試し読み版

芝居の心^③

米田政行 編著



芝居の心

まえがき

あけましておめでとうございます。

今年は、こんなカタチの年賀状になりました。

『ぎゃふん』は第1号が2001年、第2号が2008年発行で、第1号と第2号の間が7年、第2号とこの第3号の間が4年ですから、おおよそ前号の半分ぐらいの期間で完成したことになります。うん。自分、がんばった！ 感動した！

なにげに『ぎゃふん』は今年で11年目に突入。それを記念してロゴも一新してみました。ほんとは「10周年」の昨年にするべきでしたが、そのへんがまた“負け犬”らしいということで。

今回は内容が大きく4つのパートに分かれています。

パート1とパート2は、前号同様、ブログにアップした文章をただひたすらコピペしていったものです。前号は背景に写真が入っていたりしてそれなりに手間をかけていましたが、今回は文章だけ。(本の表紙やDVDのジャケットがちょこっと入っていますが。)なるべく手間をかけず、少ない時間でどこまでできるかという、マイナスペクトルの方向にチャレンジしてみました。作るほうが“手抜き”をしているのですから、ぜひ肩ひじ張らず気軽に読み進めていただければ幸いです。基本的にブログ更新日の新しいほうから順番に並べているだけなので、どこから読んでも、内容がわからなくな

ることはありません。

ただ、それだけでは、「本を編集する」おもしろさが味わえないので、パート1「作品レビュー」、パート2「社会科学的な考察」というように内容でひとまとまりにしてみました。

パート3は、「ニコニコ動画」にアップした動画「怪談の朗読」を誌面で再構成したものです。はたして成功しているか、いや何をもって成功とするのかは不明ですが、よろしければご一読を。

パート4は一昨年に仕事で作った本の制作日誌です。1～2年前のことは憶えていても、10年経てば忘却の彼方でしょうから、人生の一部を消費し、その結果うまれた成果を記録する意味で、ひとつのパートとして構成してみました。

週末の夜、MacBook（ノートパソコン）を持って、「ぎゃふん工房別館」（世間では「ジョナサン」とも言う——あれ？ これ前号にも書いたネタだっけか）に行き、お酒とつまみを楽しみながら、編集作業に没頭してできたのが本書です。酒を飲みながら仕事をすることは許されないでしょうが、この本の編集はあくまで“趣味”なので、ほろ酔い気分でパソコンに向かっていても、誰にも文句を言われる筋合いはありませんよね？

ただ、アルコールの作用による文章のおかしいところ、作りが粗いところなどがあるかもしれませんが、そこはご愛嬌ということで。

では、まずは次ページからの「もくじ」を参考に、お好きなページからお読みくださいませ。

2012年1月1日

米田政行

もくじ

まえがき..... 002

パート1 ブログに書いた作品レビューを本にしてみた 009

- 『大震災の後で人生について語るということ』
世界は大震災の前から変わっていた..... 010
- 『龍が如く OF THE END』
歓楽街で遊んでいる暇はない..... 011
- 『扉は閉ざされたまま』
絵に描いたようなミステリーだからこそ盤石..... 012
- 『君の望む死に方』
舞台設定は特殊だが正統派の本格推理ショーが堪能できる..... 013
- 『[リミット]』
観てるこっちが息苦しい..... 014
- 『レジスタンス3』
これこそほんとうの〈抵抗〉^{レジスタンス}..... 015
- 『荒木飛呂彦の奇妙なホラー映画論』
ジョジョ・ファンは共感できることしきり..... 016
- 『サラメシ』
食欲よりも“のぞき見”の欲望を満たしてくれる職業紹介番組..... 017
- 『わが魂、久遠の闇に』
“人肉食い”の衝撃描写より復讐する男の“気概”に同調したい..... 018
- 『C』
後出しジャンケン的な世界観の開陳が惜しいかな..... 020
- 『SUPER 8 / スーパーエイト』
パロディでもオマージュでもない現代の新しい“ピカイチ☆”映画だ..... 022
- 『新世界より』(上)(中)(下)
テレビゲーム世代には親和性が高いけど..... 024
- 『空白の叫び』(上)(中)(下)
〈心の闇〉を持つ者は誰か?..... 026
- 『カイジ 人生逆転ゲーム』
あの世界が実写で見られるのは嬉しいが詰めの甘さをもったいない..... 028
アニメ『もしドラ』のあとに真反対の『カイジ』を観るという幸せ..... 030
- 『告白』
ホラーとコメディの境界線を微妙なバランスで渡っていく映画..... 032
- 『CIRCUS』
歌のうまい女優によるPVの無敵ぶり..... 033

もくじ

『レベルE』 見た目は違和感があったがストーリーのおもしろさがそれを打ち消してくれた ……………	034
『あらびき団 第2回本公演』 笑いのインフレに注意 ……………	035
『屍鬼』 魂を吹き込まれ甦った者の哀しみも甦る ……………	036
『バラエティ番組がなくなる日』 テレビってそんなに大切なもの!? ……………	037
『ブラック会社に勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない』 これはなかなかの問題作かもしれない……………	040
『インセプション』 物語や設定の独創性ではなく映画のたたずまいを凡庸にしたところがよい ……	042
『アウトレージ』 もはやギャグにしかならないヤクザものに対する的確な視線が光る ……	044
『アバター』 3D劇場で体感したのは〈立体感〉よりも〈重量感〉……………	046
『収穫祭』(上)(下) フラフラした記述で予測がことごとくはずされる ……………	048
『BIOSHOCK2 (バイオショック2)』 ほんのちょっとがとっても大事 ……………	049
『センパイ♡秘密の恋』 ほんとうは「電子書籍元年」ではない……………	050
『センパイ♡秘密の恋』 いちおうローティーンの女の子向け恋愛小説だけど……………	054
『センパイ♡秘密の恋 1 ~あたしがモデルになったワケ~』 小説とはまたちがった魅力がある ……………	057
『maenon.』 前田希美はじめての写真集キタコレ! ……………	058
『エコエコアザラク 黒井ミサ ファースト・エピソード』 ホラー女優・まえのんのプロモーションビデオ……………	060
2011年はオーディオ環境を強化したよ……………	062

もくじ

パート2 政治・経済・社会についてちょっと語る 063

〈人権〉私はこいつを〈FHR〉と名づけて呼んでいる……………	064
〈FHR〉って〈A.T. フィールド〉のことじゃね?……………	066
「それは問題だ!」という問題 —「もんだい問題」ばーと1—……………	068
それがほんとうに〈理想〉なの? —「もんだい問題」ばーと2—……………	071
謎のコード「ピー・エー・ケー・エー・オー・ダッシュ」とは?……………	075
〈アジェンダ・セッティング〉(仮)とは? —「もんだい問題」ばーと3—……………	076
〈政治〉と〈政局〉はちがう —アジェンダ・セッティングの応用例—……………	078
敵は誰かを突きわめよ —〈アジェンダ・セッティング〉プチ講座—……………	080
〈アジェンダ・セッティング〉とは〈世界の果て〉のこともかもしれない……………	084
新聞の役割 —〈世界の果て〉プチ講座—……………	086
とうとう〈バイツァ・ダスト〉が発動!! —東京都青少年健全育成条例改正案が成立—……………	087
お正月は暇なので「戦争と平和」について考えてみた 1日目:『ブレデター』……………	090
お正月は暇なので「戦争と平和」について考えてみた 2日目:『サイレン』……………	094
お正月は暇なので「戦争と平和」について考えてみた 3日目:小林泰三『C市』……………	097
お正月は暇なので「戦争と平和」について考えてみた 最終日:藤子・F・不二雄『宇宙船製造法』……………	101
まだまだお正月気分が抜けないので引き続き「戦争と平和」について考えてみた……………	103
歯医者さんで虫歯と「戦争と平和」をからめてみた……………	108
ホラー映画『13日の金曜日』で裁判のおべんきょ……………	111
「本日カサの忘れ物が多くなっております」忘れ物はカサじゃない……………	113
〈ニッポンという名の“シャングリラ”が滅亡〉それを阻止するために我々はやってきた……………	116

パート3 ニコニコ動画で怪談を朗読したよ 119

「ポタポタ」……………	121
「死者の声が聞ける電車」……………	141
「閉まるドアにご注意ください」……………	148
「とうめいのおともだち」……………	151
ゲームの「実況プレイ」にもチャレンジしているよ……………	168

このパートを読み進めるための基礎知識	170
弱冠 17 歳のモデルの実体験で小説が作れるの? ~企画からプロット制作まで~	171
2009年12月11日 結論の出ない企画会議	171
2009年12月25日 まえのんのゴーストライター登場	172
2010年1月5日 小説のあらすじがほぼ固まる	172
2010年1月14日 まえのんへ“恋愛体験”をインタビュー	174
2010年1月29日 『ピチレモン』タイアップ記事の撮影	174
ふつうの小説の編集者なら楽だったかも!? ~イメージ写真の撮影にケータイ小説の配信~	175
2010年2月10日 待望の第1話がアップ	175
2010年2月17日 天下のモバゲーで打ち合わせ	175
2010年3月8日 無念の仕切り直し	175
2010年3月12日 そして代わりのライターさんが決まる	176
2010年3月24日 小説のタイトル案に悩む	176
2010年3月31日 改訂版のプロットが完成	179
2010年4月3日 まえのんが出演する舞台「新耳袋」を鑑賞	179
2010年4月8日 まえのんのサイトをいじる	180
2010年4月20日 イメージ写真の衣装打ち合わせ	181
2010年4月22日 装丁家と打ち合わせ	182
2010年4月27日 本番直前の衣装チェック	184
2010年4月28日 意外にスムーズだったイメージ写真の撮影	184
2010年4月30日 イラストレーターさんと打ち合わせ	186
2010年5月7日 「まえのん小説」をヒットさせるには?	188
2010年5月11日 ハリウッドスター並のインタビュー時間	189
2010年5月17日 じつは完全版!?!のモバゲー配信スタート	190
ついにすべての終わりと始まりの日がやってくる ~小説の仕上げと特設サイトの作成~	192
2010年5月18日 まえのんのダメ出し	192
2010年6月8日 もうあとには戻れない校了日	194
2010年6月26日 ムービー撮影はリラックスモード	194
あとがき	198

「パート1 ブログに書いた作品レビューを本にしてみた」および「パート2 政治・経済・社会についてちょっと語る」は、〈ぎゃふん工房のブログ〉に掲載された内容をコピー&ペーストし、加筆修正を加えたものです。

「パート3 ニコニコ動画で怪談を朗読したよ」は、ニコニコ動画にアップした動画の制作ファイルから静止画像を書き出し、再構成したものです。

「パート4 『まえのん小説』はこうして生まれた」は本書のための書き下ろしです。

※各項の末尾に記載した数字は、ブログでの初出日です。

※表示の価格は税込みです。

表紙・扉写真 © Andrey Kiselev - Fotolia.com

『ぎゃふん』第3号には（光文社ペーパーボックスをパクった）次のような特徴があります。

1 ジャケットと帯がありません。

従来の日本の書籍は、いわば過剰包装であり、服にたとえればジャケットと帯という厚着をまとっています。そこで、これらをいっさい廃して、いつでもどこでも読めるというペーパーボックス本来の機能を重視して製作されています。

2 持ち運びに便利な B6 サイズ♡

今日の日本では、ケータイやスマートフォンでコンテンツを享受するのが主流になっています。それらの端末に近いサイズ・重さで製本することで、気軽にカバンに入れて持ち運び、いつでも取り出して読めるようになっています。

3 本文はすべてヨコ組です。

学校の教科書、会社の文書、インターネットのウェブサイトのテキスト、メール、手紙、論文など、いまの日本語はほとんどの場合、ヨコに書くのが普通です。ですから、できるだけ自然な形で、日本語をヨコ組で表記しています。

パート

ブログに書いた作品レビューを本にしてみた

ブログには映画やゲーム、本なんかの感想を書きながっているのですが、こうしてまとめて本にしてみると、それなりに含蓄のあることを言っているように見えるから不思議♡



『大震災の後で人生について語るということ』

世界は大震災の前から変わっていた

この日本では、3.11を境に世界が変わった——というフニキが漂っています。

たしかに、これまで社会が抱えていた矛盾、齟齬、暗部が、瞬間的に、如実に、広範囲にわたってわれわれに突きつけられた、という意味では、その「フニキ」を否定するつもりはありません。

しかしながら、考えてみれば当たり前のことなのですが、3.11よりもずっと前から世界はつねに変化し続けていたわけで、決して“ふってわいた話”というわけではありません。

とはいうものの、「では世界はどのように変わりつつあったのか」を検証することは、壮大なテーマを持つ難しい作業になります。

橘玲氏のこの著書は、その検証作業をおこなうための、よい参考書になることでしょう。

ここに書かれている主張は、橘氏がほかの著書ですでに述べていることで、目新しいものではありません。それはすなわち「3.11よりもずっと前から世界はつねに変化し続けていた」ことの証明でもあるわけです。

(2011.8.6)



【大震災の後で人生について語るということ】

橘玲

講談社 ¥1575

大人の遊び

義援金

ゾンビ

ゲーム

ヤクザ

シューティング

発売延期

『龍が如く OF THE END』

歓楽街で遊んでいる暇はない

大震災の影響で発売が延期され、3か月後に届いたパッケージには「がんばろう、日本！」の文字が……。

売上の一部が義援金として寄付されるらしいから、現実の「日本」を応援していると思っていたら、じつはゲームの世界の「日本」なのであった——というのは冗談であるが、『バイオハザード』の「ラクーンシティ」ではなく、もしも新宿に〈ゾンビ〉が現れたら？というリアルシミュレーション的世界観は趣深い。

ゾンビと戦いながら、歓楽街でパチスロ・射撃場・キャバクラで遊ぶ。なかなか斬新な発想ではないか。

つまり、「ゾンビ発生」のような〈大災害〉が起こっても、〈日常〉は続いている、ということなのだ。

ただ、その“歓楽街での大人の遊び”を満喫するほど、こちらは暇ではないので、どうしても本流のゾンビ退治のほうに没頭せざるを得ず、本作品の魅力を100%堪能できなかったのは残念だ。

シューティングゲームとしては大味な部分もあるけれど、ゾンビをパシパシと撃っていく作業には原始的な喜びを覚えるし、楽しい。ゲームの基本は押さえている佳作といえるだろう。(2011.10.10)



【龍が如く OF THE END】
PlayStation3
セガ ¥7980

倒叙ミステリー

石持浅海

本

同窓会

密室殺人

『扉は閉ざされたまま』

絵に描いたようなミステリー だからこそ盤石

石持浅海作品は初めてでしたが、たいへん楽しゅうございました。

大学の同窓会。級友たちの集う館で起こる密室殺人。

「刑事コロンボ」や「古畑任三郎」などでおなじみの、いわゆる「倒叙ミステリー」というやつで、犯人も犯行方法も最初から明らか。登場人物は7人で、物語は館の中のみで展開。7人は飯を食っているか、寝ているか、しゃべっているかだけ。

純粹に「推理のロジック」だけを堪能できるようになっているわけです。

まさに典型的なミステリー。プレーンな物語。だからこそ安定感があるといえます。

さて、次の石持作品は何にしようかな？

(2011.2.19)



【扉は閉ざされたまま】
石持浅海
祥伝社文庫 ¥630

『君の望む死に方』

舞台設定は特殊だが 正統派の本格推理ショーが堪能できる

余命6か月というガン告知を受けた大企業の社長。彼は自らの贖罪のため、殺されて死ぬ最期を選ぶ。贖罪の相手とその同僚たちを研修の目的で呼び寄せながら、“犯行”の準備を整えていく――。

個人的な読書体験としては、2つめの石持作品です。

前回は「絵に描いたようなミステリー」だったのに対し、今回は舞台設定がきわめて特殊です。“犯人”（正確には“犯人役”）も“犯行方法”もあらかじめ明らかかなことから、〈倒叙ミステリー〉に分類することも可能でしょうが、やはりその枠からも外れています。

研修のゲストとして招いた人たちの中に、『扉は閉ざされたまま』にも登場した碓氷優佳うすい ゆかがいたことから、社長の思惑は狂い始めます。優佳は、事件がまだ起こっていないのに、“殺意”の存在だけをいちやく嗅ぎ取って、真相を推理していきます。そして、物語の終盤からは、本格推理ショーが展開します。

舞台設定こそ奇をてらったものに見えますが、実際は前回同様、「推理のロジック」を純粹に堪能できるようになっているのです。(2011.10.22)



ケータイ

社会風刺

棺桶

映画

閉鎖空間

ライター

蛇

『[リミット]』

観てるこっちが息苦しい

ネタバレにならないようにレビューも簡潔に――。

これは息苦しい。ほんとうに息の詰まる映画だ。

これだけ状況に没入、主人公に感情移入するというのは、それだけ脚本がよくできているのでしょう。

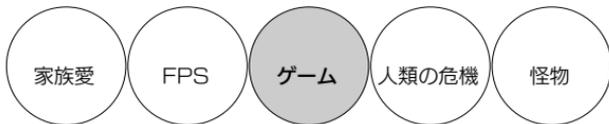
「どうしてこうなった？」が物語の中盤ぐらいで明らかになるので、これはもっとひっぱってもよかったのではないか、という気もしましたが、『ソウ』シリーズ、『キューブ』シリーズの垂流に陥ることを回避しようとしたのかな、と思えなくもありません。

(2011.10.15)



【[リミット]】

出演：ライオン＝レイノルズ 監督：ロドリゴ＝コルテス
[DVD コレクターズ・エディション] Happinet ¥3990



『レジスタンス3』

これこそほんとうの^{レジスタンス}〈抵抗〉

「レジスタンス」という言葉には「微力ながらも信念を持って強大な力に〈抵抗〉する」というイメージがある。この第3作目をプレイしてから、前2作を振り返ると、戦っていたのはオフィシャルな軍隊だし、主人公は超人だし、厳密な意味での「レジスタンス」ではなかった気がしてくる。

本作の主人公も、実際プレイしていると、けっこう「超人」ではあるが、全世界が敵勢力に完全に支配され、人類はほそぼそと地下で暮らしていくしかない、という世界観は、まさに「レジスタンス」というタイトルにふさわしいイメージといえる。

人類を救おうというより、妻と子どもを守るために戦う、というのは、映画などの物語ではもはや陳腐な設定かもしれないが、ゲームの動機づけとしては、なかなかいい塩梅だ。

ゲームとしての遊びやすさは前2作から踏襲されており、敵の猛攻に初見クリアが困難な局面もあるが、ライフ回復の配置など細かい部分に配慮が行き届き、絶望的ではあるが希望がないわけじゃない、というゲームバランスは秀逸だ。(2011.10.10)



【レジスタンス3】
PlayStation3

ソニー・コンピュータエンタテインメント ¥5980

ホラー論

荒木飛呂彦

本

表現者

映画

『荒木飛呂彦の奇妙なホラー映画論』

ジョジョ・ファンは 共感できることしきり

あれれ？ なによ、なによ？ 荒木先生がこんな本を書いたの？——と驚きのあまり、そのままレジへ走らされてしまった本です。

荒木飛呂彦先生といえば、もはや説明するまでもなく、『ジョジョの奇妙な冒険』の作者。『ドラえもん』『サザエさん』などと同様に、世代を超えて愛されるマンガの描き手であります。

『ジョジョ』の愛読者は、すなわち荒木先生と同じ〈感性〉を持っているということでもありますから、この本に書かれていることにはことごとく共感できるのです。

ここで扱われているホラー作品は、ほとんど観たことがあります（すべて、ではないところに、われながら詰めの甘さを感じてしまうのですが）、個人的には荒木先生とのシンクロを堪能することができました。

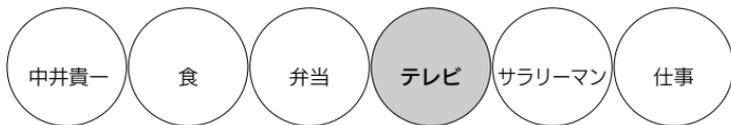
また、『バオー来訪者』が『エイリアン』からインスパイアされたものであるなど、“評論者”というより“表現者”の視点から語られる部分には、「そうか、そういうことか」と目からウロコが落ちる思いを感じることがあります。

(2011.8.6)



【荒木飛呂彦の奇妙なホラー映画論】

荒木飛呂彦
集英社新書 ¥798



「サラメシ」

食欲よりも“のぞき見”の欲望を 満たしてくれる職業紹介番組

「サラリーマンの昼食(サラメシ)から、働く人の〈今〉を見る」というのが番組のコンセプト。

〈食〉というのは人間の基本的な欲求のひとつであるから、グルメ番組はまさに“鉄板”。だから、つついチャンネルを合わせてしまう——というのはあくまで“企画書”の分析。実際は、たしかに“グルメ番組”的な要素はあるものの、そしてそれも大きな惹きになっているものの、本質は〈職業紹介〉なのです。

「街で働くあの人は、どんなメシを食っているのか」という問いかけは、この番組においては「あの人はどんな仕事をしているのか」と同義です。

メニューやレシピをくわしく紹介するわけではないので、食欲というよりは、むしろ“のぞき見”の欲求を満たしてくれる番組なのです。

パイロットや豪華客船の船長も登場しますが、町工場でおばさんなど市井しせいの人のお弁当も扱います。

〈働く人〉であるならば、職業、年齢、性別は無関係。すべての人は平等、公正。

そんなことを再認識させてくれるたいへん意義深い番組であるといえます。(2011.7.30)

墜落

人肉食い

西村寿行

本

復讐

人妻

衝動

『わが魂、^{とわ}久遠の間に』“人肉食い”の衝撃描写より
復讐する男の“気概”に同調したい

中高生のころの読書体験は人格形成に大きな影響を与えていると思いますが、私の場合、星新一、筒井康隆と並んで、貪るように読み倒したのが西村寿行でした。

先日、久しぶりに読みたくなって押し入れから引っぱり出したので、レビューを書いてみたいと思います。

有名大企業の重役が、幼子を連れた人妻を強姦。コトを穏便にすませるため、妻子を自家用飛行機に乗せて説得しようとする。途中、飛行機は極寒の雪山に墜落。救助もなく食料も尽きた状況下で、搭乗者たちは、子どもと人妻の“人肉”で飢えをしのごうとする。

——とあらすじを書いているだけでかなり“えげつない”のですが、個人的にはこの作品そのものが再読ですし、西村寿行作品に馴れ親しんだ者としては、魅力的ではあるが“衝撃”というほどではありません。

でも、ふつうの感覚では、そうとうにショッキングですよね、これは。

実際、“人肉喰い”（カニバリズム）というのがこの作品のモチーフになっており、その描写はかなり凄惨なものです。

ともすれば、残酷な描写を楽しむだけの醜悪な作品

になるところなのですが、西村寿行ならではの重厚な筆致で、人間の本質、人間が生まれながら持つ“業”のようなものをさらけ出すことに成功しています。

人妻を強姦——もちろん、許されることではないが、ではそういう“衝動”は自分のなかに絶対にないと断言できるのか。

人肉喰い——もちろん、想像するのもはばかれることだが、みずからが極限状況におかれたらどうか。

……などというように、読者の心の奥底をみずからのぞき見ることを強制させられる作品でもあります。

また“人肉喰い”というのは、あくまで物語の構成要素のひとつであって、作品全体は「妻を醜男たちに食われた夫の復讐譚」なのです。

今では、この作品の核となるグロテスクな描写のほうではなく、もう一方の本質である「妻の魂のために戦う夫」のほうに共感したいと思う自分を発見します。

中高生のころとちがって、今の自分はこの夫と同世代。主人公と同じような男の気概、矜持をオマエは持っているのか——。そう問いかけられている気がします。

(2011.7.23)



アセット

ホラー要素

アニメ

テレビ

マナー

橋本敬史

バトル

『C』

後出しジャンケン的な
世界観の開陳が惜しいかな

監督：中村健治、キャラクターデザイン：橋本敬史
の『化猫』コンビの作品で、番組の紹介文に「ホラー
要素あり」とあったので見始めました。

実際は「どこにホラー要素が？」という疑問もあり
ましたが、バトルシーンのダイナミズム、“異世界”
の独創的なデザインなど、テレビアニメとは思えない
クオリティに仕上がっていると感じました。

細かい部分では“異世界”からキャラクターが話し
かけてくる際のテロップの入り方が気に入りました。

物語としては、乱暴に言ってしまうえば、〈経済〉と
いう抽象的な概念を、アニメーションの〈映像〉とい
うカタチで具体化したものと考えられます。

ただ、これがはなはだわかりにくい。

〈未来〉を〈お金〉に変えているというのはわかる。
またそれによって現実世界が影響を受けるというのも
理解できます。

ですが、細かい世界観の設定を把握するのが容易で
はない。

第1話を見て「なんかよくわからないけど、そのう
ち明らかになってくるのかな」という期待を持って毎

週楽しみにしていたのですが、結局最後までわからないことだらけ（まったく理解できないというわけではないけれど、なんかモヤッとしたものが残る）でした。

このタイプの作品は、シリーズの序盤で独特の〈世界観〉（＝その世界の独自ルール）を説明し、以降はそれを前提としたストーリー、ルールを活かしたバトルを展開していくのが王道ではないかと思います。

しかし、『C』のように、終盤で新しい概念が出てくるのは、ご都合主義のそしりを免れないと思います。

もちろん、1回通して見ただけだからそう思うのであって、あらためて見直せばまたちがった印象になるかもしれません。でもそれはそれで、DVDを売るための戦略では？ というゲスの勘ぐりも成り立ちます。

〈世界観〉が独特なので、もう少し物語は典型的にし、「アセット」と呼ばれる異世界のキャラクターの魅力をもっと前面に出してくれれば、もう一度見直そうという気も起こるのですが。

けっして駄作ではない（いやむしろ佳作）だけに、じつに惜しい作品であるといえます。

(2011.7.16)



【C】
監督：中村健治 アニメーションキャラクターデザイン：橋本敬史
出演：内山昂輝 戸松遥
[DVD 第1巻 初回限定生産版] 東宝 ¥3990

スピルバーグ

パニック

1980年代

映画

モンスター

少年

自主製作

『SUPER 8 / スーパーエイト』

パロディでもオマージュでもない
現代の新しい“ピカイチ☆”映画だ

映画づくりに熱中する子どもたちが撮影中、軍隊の貨物列車の脱線事故に遭遇。カメラのフィルムを現像してみるとそこに映っていたものは……？

——と、あらすじを書いているだけで、“絵に描いたような”“典型的な”“ありふれた”モンスターもの、パニック映画の匂いが漂ってきます。

実際、目の前で展開するのは、まさに1970～1980年代、子どもたちに見た「モンスター映画」「パニック映画」でした。スクリーンからはどこか懐かしい香りが立ち上がってきます。

つまり、古きよき時代の映画のパロディ、オマージュとして作られている映画——のように思えます。

しかし、物語が進むにつれて、これは懐古趣味で作られたものではなく、「現代の新しい映画」を見せようとしていることに気づきました。

たしかに、表面的には往年の映画への憧憬にあふれています。

しかし、映画という表現の本質である「人間ドラマを描き出す」という部分において、一本芯を通してることがわかります。

ともすれば“絵に描いたような”“典型的な”“ありふれた”映画に陥りがちなリスクをあえて冒し、ひねりのない直球勝負、王道の作品づくりに果敢にチャレンジした制作姿勢に好感が持てます。

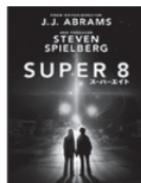
だから、われわれが「見たかった映像」「心ゆさぶられたかったドラマ」「浸りたかった世界観」が、期待を裏切ることなく、スクリーンに展開していきます。

「昔、たしかにこういう映画が好きだった。そして今でも大好き」という事実を再確認できる幸せ。それを嘖みしめることができる映画といえます。

まさに、レンタルDVDではなく、映画館で見てよかった映画。それは、大きなスクリーンで迫力の映像が楽しめるからではありません。ただ純粋に高いお金を払う価値のある映画だからです。

ところで、日本語吹き替え版で「ピカイチだぜ」となっていたセリフは、英語では何と言っているのでしょうか？

(2011.7.2)



【SUPER 8 / スーパーエイト】

脚本・監督：J. J. エイブラムス

出演：カイル＝チャンドラー エル＝ファンング ジョエル＝コートニー

[DVD] パラマウント ジャパン ¥4179

心の闇

呪術

貴志祐介

本

文庫本3冊

遠い未来

『新世界より』(上)(中)(下)

テレビゲーム世代には親和性が高いけど…

1000年後の日本。旧世紀の文明は滅び、呪力が支配する世界。

文庫本3冊(400字詰原稿用紙約2000枚)にわたって描かれる世界は、青春物語あり、ミステリーあり、ファンタジーあり、戦争アクションありの痛快エンターテインメントに仕上がっています。

とくに私たち“テレビゲーム世代”には親和性が高く、超大作RPGをプレイしているような、じつに楽しいひとときが過ごせます。

だが、しかし――。

『クリムゾンの迷宮』『天使の囁き』『黒い家』『青の炎』といった貴志作品のファンとしては少し違和感を感じるのも確かです。

貴志祐介は、まあ陳腐な表現ですが、人間の〈心の闇〉を描く作家ではないかと思っています。

『新世界より』でも、〈心の闇〉がモチーフになっているところはあるのですが、あくまでも虚構世界におけるそれであり、現実世界に住むわれわれが持ち得ないものです。

そこがこれまでの作品と異なる部分です。

『クリムゾンの迷宮』などは、設定そのものがゲーム的でありながら、しかしRPGでは表現できない〈心の闇〉のありようが描かれました。

それに対して『新世界より』は「これだったらゲームでいいじゃん」って思ってしまうのです。

もちろん、最初に述べたように、駄作ではありません。それどころか、超一級の娯楽作品であることは間違いないでしょう。

ただ、これまでの貴志作品にあったような〈何か〉を期待してしまうと、ちょっと肩すかしを喰らってしまうかも、というわけです。

(2011.3.26)



【新世界より】(上)(中)(下)
貴志祐介

講談社文庫 [上] ¥760 [中] ¥710 [下] ¥830

どんでん返し

少年犯罪

貫井徳郎

本

上中下巻

少年院

『空白の叫び』(上)(中)(下)

〈心の闇〉を持つ者は誰か？

はい。〈心の闇〉でございます。

奇しくも、ちょっと前に読んだ貴志祐介『新世界より』は、当然〈心の闇〉が読めると思っていたのに、実際はちがっていたので、その部分だけは残念だった、とコメントしました。

この『空白の叫び』を読み終えたときに、貫井徳郎も〈心の闇〉の作家だったのを思い出しました。

というより、中巻の帯に〈心の闇〉と書かれていますし、本文にも出てきます。

心の闇——、便利な言葉だと久藤も思う。それですべてに説明がついた気になるではないか。少年は心に闇を抱えていたのだ。闇は社会が生み出した病巣だ。闇を抱えているから犯罪に走る。普通の人には闇など抱えていない。だから安心だ。めでたしめでたし。

そして、『空白の叫び』は、(これも『新世界』と同様) 文庫本3冊にわたって、少年たちの〈心の闇〉が描かれます。

大雑把にいうと、上巻は少年たちが犯罪をおこなうまでの軌跡、中巻は少年院での“更生”の模様、下巻は退院後の少年たちの行動を描いています。

少年たちは“殺人”という一線を越えてしまうわけですが、そこに至るまでの過程は私たちも十分に“納得”できるものであり、“普通の人間”から“殺人者”への移行は極めてスムーズです。

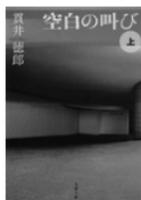
これはべつに「わかる、わかる。少年たちの気持ちに大いに共感できるぞ」などという上目線からの感想ではありません。そんな生やさしいものではなく、先に引用した「久藤」の言葉を借りれば、私たちも〈心の闇〉を持っているということなのです。

そこにこの作品の恐ろしさがあります。

ただ、下巻の少年たちの行動や、ラストのどんでん返しは、物語としてのおもしろさはともかく、あまり“共感”できるものではありませんでした。

これは深読みすれば、“共感”できるものにしてしまうと、小説の世界と私たちの住む現実の〈心の闇〉が地続きになってしまうから、あえて両者を断絶させるために虚構性を高めた、と思えなくもありません。

(2011.5.15)



【空白の叫び】(上)(中)(下)
貴井徳郎

文春文庫 [上] ¥710 [中] ¥750 [下] ¥750

イカサマ

限定ジャンケン

ドラマ

映画

ギャンブル

Eカード

『カイジ 人生逆転ゲーム』

あの世界が実写で見られるのは嬉しいが
詰めの甘さがもったいない

ジャンケンやEカードのルールを単純化し、原作の持ち味であった心理描写に深みがなくなってしまった——のは、まあいいだろう。

映画でマンガの魅力を100パーセント再現するのは土台ムリな話。なので、はなっからそこを期待しちゃいないし、原作のファンとしては「カイジ」の世界が実写で見られることに楽しみを見出したほうがよい。

そう考えると、この映画のエスポワール、鉄骨、Eカードなど、舞台装置や小道具の存在感はすばらしい。カイジ役の藤原竜也をはじめ、配役もよい。

遠藤さんが“性転換”してしまったことに一抹の不安はあったが（「カイジ」の世界は“女人禁制”なので）、終盤の展開を見ると、これはこれでアリかと思う。

ただ、遠藤さんが女性になったのなら「地下の強制労働施設に送られることはないじゃね？」という違和感をきっかけに思考の糸が紡ぎ出されていく。

原作と同じセリフを映画でもしゃべっているわけだが、映画化にともなう設定の変更によって、そのセリフが死んでしまっているところがあちこちに見受けられるのだ。

冒頭のジャンケンは、制限時間を短縮し、電光掲示板をなくすのはよいとしても、テーブルにはそれぞれ黒服の男を配置し、やはり「チェック」「セット」「オープン」の手続きは厳格におこなうべきだ。

映画では、こういったディテールがおざなりで、ゲーム全体にグダグダ感が漂っているため「負けたら地獄行き」という緊迫感がない。

『「明日からがんばろう」という者に明日は来ない』というセリフに説得力を持たせるには、「今日はいいか」と墮落する場面がなければなるまい。

ほんとうにセリフを一行削るか追加するかで十分改善できるように思えるのだが……。

製作過程でいろいろな悪条件があったと想像できるが、脚本・演出の詰めのは甘さは非常にもったいない。

続編でそのあたりが改善されているのを期待したい。

(2010.7.10)



【カイジ 人生逆転ゲーム】
出演：藤原竜也 天海祐希 香川照之 山本太郎 光石研 監督：佐藤東弥
[DVD 通常版]パップ ¥3675

つづきは正式版でお楽しみください。